

イシイルカ 太平洋・日本海・オホーツク海

Dall's Porpoise, *Phocoenoides dalli*



管理・関係機関

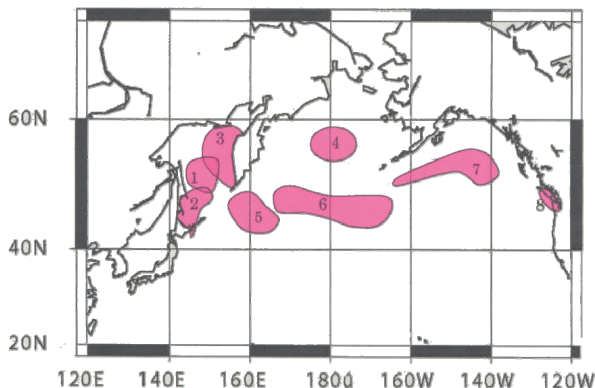
水産庁・漁業道県

最近一年間の動き

2007年のイシイルカ型の捕獲は2004年と同様にやや低いレベルにあり、浜値低迷と燃油高騰の影響と考えられる。捕獲枠は計画的に見直された。

生物学的特性

- イシイルカ型とリクゼンイルカ型の2型
- 寿命：15～20歳（詳細は未解明）
- 性成熟年齢：雌3～4歳、雄4～6歳
- 繁殖期・繁殖場：晩春から夏、オホーツク海（成熟雌は1～2年毎に出産）
- 索餌期・索餌場：周年、北海道沿岸、オホーツク海、三陸沖
- 食性：ハダカイワシ類、スケトウダラ
- 捕食者：シャチ

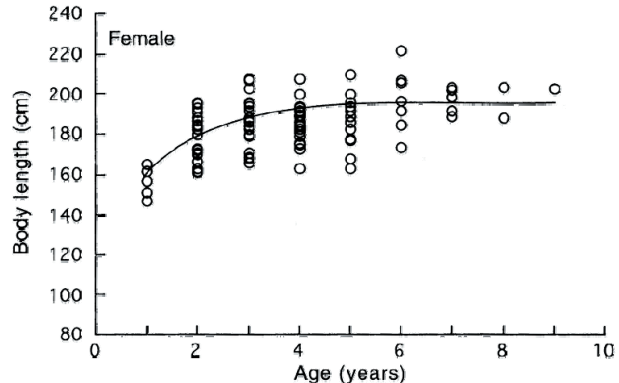
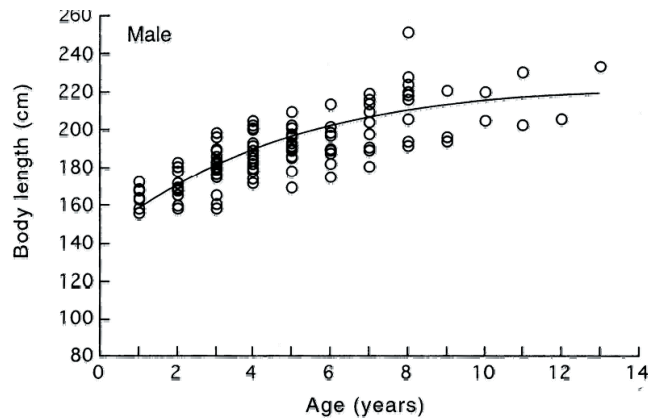


北太平洋のイシイルカの分布（吉岡・粕谷 1991 を改変）

- 1 はリクゼンイルカ型系群
- 2 はイシイルカ型の日本海-オホーツク海系群
- 3～8 はイシイルカ型他系群の各繁殖海域

利用・用途

刺身、煮物など



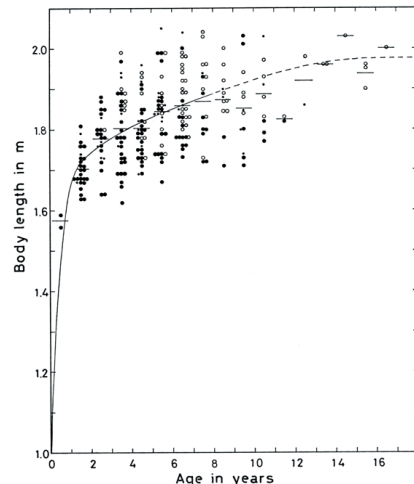
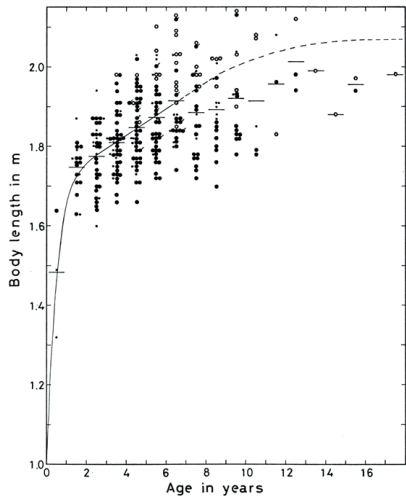
イシイルカ型イシイルカの成長曲線（上：雄、下：雌）（仲松 2000）

漁業の特徴

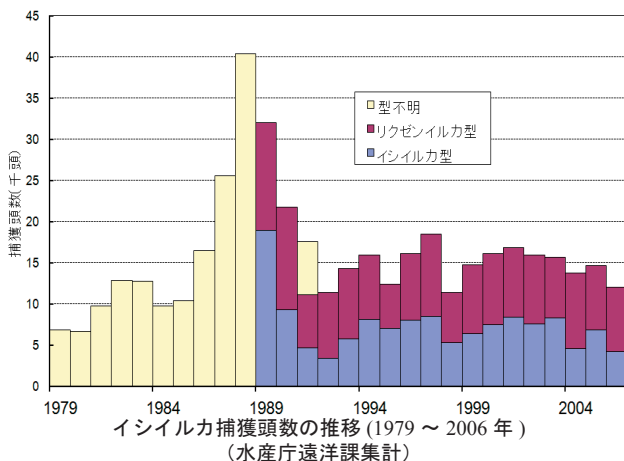
北海道、青森県、岩手県および宮城県で知事許可の突きん棒漁業で捕獲されている。この漁業は現在、いるか類の漁獲頭数では我が国最大である。捕獲は岩手県船が卓越している。操業は5～6月と9～10月に北海道周囲で、11～4月に三陸沖で行われる。リクゼンイルカ型は1系群である。イシイルカ型の大多数は日本海-オホーツク海系群である。大型捕鯨業のモラトリアムによって本漁業には好況期もあったが（平成6年度、600円/kg）、現在は浜値が低迷中（300円未満）である。

漁業資源の動向

1987年以前は年間2万頭以下の捕獲であったが、モラトリアム以降は鯨肉の流通不足を補うためか、1988年に捕獲頭数が4万頭以上へと急増した（この年までは、2つの型が統計上区別されていない）。その後は捕獲枠導入によって両型合計15,000頭程度の水準にある。特に近年は需要がひげ鯨に戻りつつあるため、魚価維持のために業界は漁獲を調整しているように見受けられる。



リクゼンイルカ型イシイルカの成長曲線
(上：雄、下：雌)
(Kasuya 1978)



イシイルカ捕獲頭数の推移(1979～2006年)
(水産庁遠洋課集計)

資源状態

イシイルカ型は1980年頃から開発された資源と考えられるが、リクゼンイルカ型の漁獲は戦前からの長い歴史がある。両型とも、危急の状態とは判断されておらず、現在、各種調査データを検討中である。両型の資源水準は、規制・操業形態等の変化により、見定めることが非常に困難で、現在調査中である。資源動向は過去5年間の捕獲がほぼ安定していることから横ばいと考えられる。

管理方策

鯨類の再生産率は1～4%と経験的に考えられている。出産間隔から本種の再生産率が高い方(3～4%)であることが窺える。これに捕獲実績等も加味して1993年に捕獲枠が設定された。資源管理モデルの構築を求められているが、水産庁は本種の管理にPBR(Potential Biological Removal; Wade 1998)の概念を適用した。PBRは、不確実性を取り込んだ捕獲枠決定方式であり、算出が容易であり、また捕獲枠の根拠の説明も容易である。

資源評価まとめ

- 目視調査に基づく資源量推定値
- 管理目標は現在の資源水準の維持
- PBRの導入

資源管理方策まとめ

- 操業海域の道県知事による許可制
- 体色型別の捕獲枠の設定
- 漁期の設定
- 捕獲統計の集計

型別・道県別捕獲枠(岩崎ら2001、水産庁)

体色型	捕獲枠 (2008年度)	
イシイルカ型	北海道	1,399頭
	青森県	16頭
	イシイルカ	6,721頭
リクゼンイルカ型	岩手県	260頭
	宮城県	95頭
	イシイルカ	7,805頭
	宮城県	16頭

イシイルカ(太平洋・日本海・オホーツク海)の資源の現況(要約表)

資源水準	調査中
資源動向	横ばい
世界の漁獲量(最近5年間)	---
我が国の漁獲量(最近5年間)	1.1～1.6万頭 平均：1.3万頭